

ある問題家庭のケースワーク

柴 田 善 守

A Casework with a Multi-Problem Family

YOSIMORI SIBATA

序

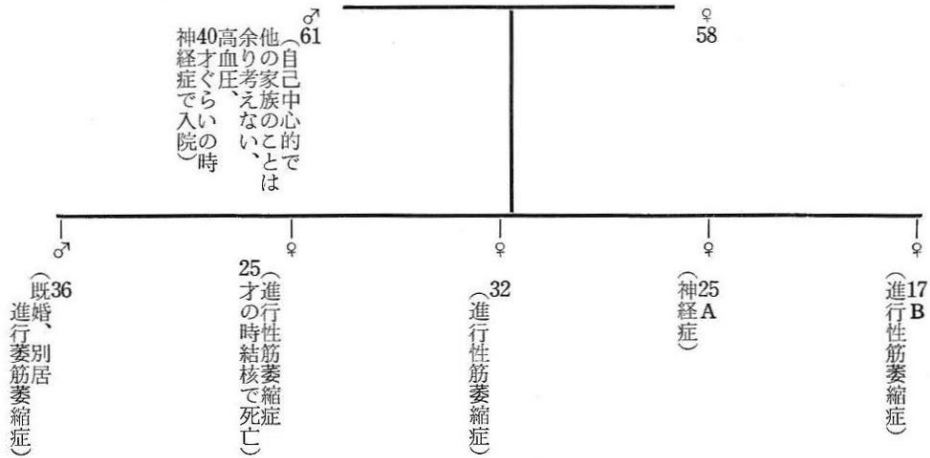
このケースワークが正確な意味でファミリー・ケースワークであるとはいえないかもしれない。というのは、この家族が社会に対外的拒否的でなく、したがって接近が困難であるという問題家族でもなく、またワーカー自身の家族への接近も意識的には家族全体をつねに考えてはいたが、実際には問題をあらわして来た二人の個人のケースワークの連続ともいいうるからである。もちろんこの二人の個人の面接を中心として他の家族成員との面接もほぼ月1回はつづけたのである。したがって典型的なファミリー・ケースワークであるとはいえないけれども、ケースワークの過程中、家族成員間の心理的關係に変化があり、個々の問題の解決とともに家族全体の安定が獲得されていったという点でファミリー・ケースでもあるといえる。

昭和39年6月、T病院医師より、電話連絡によって、P家の問題について相談に応じるよう依頼があった。P家の兄妹5人中4人が進行性筋萎縮症なる病氣をもっていること、うち1人は健康であるが神経症で、父親にも問題があり、現在母親1人で1家を支えているという簡単な説明があった。また進行性筋萎縮症患者の保護者の会をつくっているからその指導もされたいということであった。

6月19日、母親来学、進行性筋萎縮症患者保護者の会について、すでに東京ではつくられ、近畿支部を早急に形成したいこと、患者の発見方法、日程などについて相談。このあとP家の家族について、5人の兄妹のうち4人が進行性筋萎縮症で下から2番目だけが健康であるが神経症であり、O病院、W病院、T病院などに行って見たが、軽度の不安神経症ということで内服薬をもちいているにすぎない。幸いこの家庭の進行性筋萎縮症は進行が遅く、いづれも身の回り世話は1人でできるのであるが、神経症の妹を中心として現在一家は崩壊の危機にあるということであった。

ワーカーはT病院医師と連絡、神経症の妹A（以下Aという）についての所見をもとめたところ、軽度の不安神経症であり、家族全体に問題があり、カウンセリングによる指導が適当との所見であった。ワーカーはAのケースワークを中心とするファミリー・ケースワークを開始することにした。

第1図 39:6 現在の家系図



家族成員の素描

母親——やせ形，活動的，楽天的，ものごとに拘泥しない。趣味は読書，観劇。大阪の中心部で却商店を経営する家庭に長女として出生，東京の某女子大を卒業，養子を迎えて家業をつぐ。教養はかなり高く，実践的行動型である。戦前は家業順調であったが戦災にあい家業中絶。大阪市近郊に転居。

敗戦後，夫はいろいろの事業に手を出し，当ったこともあったが多くは失敗し，21年頃神経症にて某病院に入院（病名不詳）。この時すでに第4子までを出生，第2子までは進行性萎縮症を発病，第1子の時以来多くの医師に治療を依頼したが，この病気が治療不可能であることを知り，医療は中止している。一方戦後の生活不安の中で夫が頼むことができないことを知り，彼女が生活を維持しなければならないので，対外的なことは一切夫に代っておこなうことになる。

このような生活は彼女のパースナリティに適合していたのであって，事業の計画，経営に種々苦勞はしているが，現在まで事業や生活を軌道にのせている。この間長女は進行性筋萎縮症であるが，家庭内の主婦的役割をおこない，低年齢であったAおよび22年に生れたBの養育を担当している。昭和32年長女が結核で死ぬまで家庭内の中心は長女であった。この後は次女が役割を担当している。現在では戦前からあった大阪市近郊の土地，家屋で資産も安定し，身体障害者が家族成員に多いという条件を考慮して，たばこ屋などを経営し，収入も安定している。これらの計画は母親の企画と決断によるところが大きい。

父親——ワーカーは父親とは直接面接していないが，妻，子供から情報によるとつぎの通りである。自己中心的，優柔不断，自己顕示性性格で，家庭の中での自分の位置づけに不満がある。妻は一家の中心であり，一応は夫をたてているが依存はしていない。すでにのべたように昭和21年に神経症で入院治療をしている。最近では高血圧でぶらぶらしているが，たえずぐちがあり，同じことを何度

もいう。金銭的にも秘密が多い。服装もだらしない。計算もできないことが多い。空腹になるとたえられないで台所にきてつまみぐいをする。子供たちは「ぼけてきている」、「まかせておくことができない。」という。

兄——東京にいたのでワーカーは面接はしていないが、学校の成績はつねに優等であり、某大学卒業後、公務員として東京にいる。既婚で実家とはほとんど交通はない。彼自身進行性筋萎縮症であり、妹が同病であり、かつ妻に対する遠慮から実家との交通を断っているのであろう。しかしAに対しては結婚の仲介などをおこなって意を用いている。（これは破談になっている。）

長姉——第二子で長女であるが、25才で死亡している。しかし彼女は問題のAの生活歴に極めて重大な関係がある。前述のように戦後は彼女が家政の中心であり、AおよびBの養育担当者でもあった。性格がまじめで、几帳面で、てきぱき仕事をする型であった。進行性筋萎縮症という身体的欠陥も原因したのであろうが、性格にきびしさが見られ、妹たちのしつけも普通以上のものがあつたらしい。とくに本ケースの発端になったAに対してはきびしかったようである。しかし25才の時病気の進行と結核の併発で死亡。

次姉——進行性筋萎縮症（10才で発病）に対する自覚を早くからもち、洋裁の技術を修得して自立の能力をもっている。長姉が家政の中心であつた間はその陰にかくれて家庭では目立たない存在であつたが、長姉の死とともに家政の中心となり、母親の相談相手となる。母親が心理的な拠り所として親鸞に接近すると彼女も行動を共にしており、母親との間に相互理解がある。しかし、彼女は論理的にものを考える型であり、信仰に入ることには抵抗を感じている。また一方では不満や不安を外に表現することなく成長をしているのであるが、このような欲求不満は母親からの信頼、一家の中心であるという自負心、また妹たちの病的兆候を自己犠牲的にうけいれることによって補償されている。

Aに対する嫉妬は強く存在しているが、表現はしない。一家の中心的な緩衝地帯として彼女の位置と役割は重要である。

A——Aは妹Bとともに兄姉に比較して学校の成績はあまりよくなかった。A、Bともに母親から「できのわるい子」として成長している。すでにふれたように、A、Bの養育時代は兄姉に進行性筋萎縮症が発病しており、その上戦争と終戦の混乱期の中で、父親が能力なく、母親が生活の中心であり、結局A、Bの養育者は長姉であつた。A、Bによる父親、長姉に対する評価はかなりちがっている。長姉については、Aによればきびしい意地のわるいしつけをうけたというが、Bはそうにはいわない。Aが兄妹中ただ1人の健康者であるために、父親が自分の欲求不満のすて場としてAにつらく当たったというが、BはAだけがよく可愛がられているのを見たという。（母親および次姉も同じ意見である。）Bは兄に対してはあまり記憶はないが、Aは兄に対して強い憎悪をもっている。Aは「なるほど兄は結婚について心配はしてくれたが、破談になった時冷淡であつた」という。（次姉は兄としてはやむを得なかつたといっている。）

Aは同胞5人の中唯1人の健康者であつた。このことはAのパーソナリティ形成における極めて重要な条件である。すなわち彼女自身は健康者であるにもかかわらず、同胞の病気のゆえに外部から差

別をうけ、とくに結婚問題になると破談になっている。家庭の中では唯一人の健康者として兄姉や妹から嫉妬をうけ、両親からもAは1人でやってゆけるのだからとあまり心配をしないのみならず、潜在的に同胞の世話もみてくれることを期待されている。社会的にも、家庭的にも孤独となり、一種拒否的な抵抗をもって成長している。小学校時代にテストの答案を白紙で出したり、よく世話をしてくれた男性の教師に抵抗をしめしている。Aは「ひがんでいた」と自らのべている。中学時代はその「ひがみ」はもっとつよくなった。高校3年の時、大学進学について両親は明確な指示をあたえなかった。(Aの言)高校卒業後、某大学に入学、フランス文学を専攻し、優秀な成績で卒業。(論文はジードについて書いている。) (37. 3)

家庭はAが大学卒業すると独立してくれることを希望した。しかしAは卒業が近づくとともに社会生活に不安を感じるようになる。この頃、男子学生と恋愛関係におちいるが、Aの家庭事情を知るにおよんではなれていった。Aはその頃教授より大学院に入ることをすすめられるが、某企業に就職、関係海外出版物の翻訳を担当することになる。この職場はほとんど女性であり、少数の親しい友人もあったが、上級職、先輩と折合いはよくなかった。丁度就職後1年3ヶ月の時、前記兄の紹介による結婚の話しがあり、退職した。しかしこれは前述の通り破談となっている。(38. 7)

このころから次第にいらいらしたり、不安を感じるようになる。某会社に再就職したが、ここでも課長とうまくゆかず、8ヶ月で退職、(39. 3)。39年3月から国際見本市のアルバイトとして通訳をする。5月見本市が終り、家庭で日常生活をするが、不眠、心悸昂進、頭痛、倦怠感があり、朝雨戸のすき間から日の光がさしこむことに不安を感じ、外出も玄関まで出ると足がすくんで出られなくなる。1日中雨戸をしめて真暗の室内で、じっとしていることが多くなった。時々泣いている。母親や次姉に乱暴をする。

母親と同道してO病院、W病院の神経科で診断を受けたが、軽度の神経症であり、内服薬をもらうだけで効果はなかった。T病院ではカウンセリングを受けることになり、2回面接をしたが、カウンセラーに不信を感じて中断した。症状はいよいよはげしくなってくるようである。

Bに関しては後述。

このケースはAを中心とするファミリー・ケースワークとして開始することにした。

診 断

Aは生育歴において母親との間に十分な依存関係をもたず、また同胞の条件(進行性筋萎縮症)のために、女性としての結婚の可能性を閉されていることによる欲求不満に起因する神経症

治療方針

Aと母親および同胞との間を調整し、相互理解を深めること。男性一般に対する憎悪を少なくするこ

と。

Aは週1回面接、母親および次姉は月1回面接をおこなうこと。

ケースワークのプロセス

6月26日、約束の時間に来学。非常にやせて、顔色は悪い。視線が不安定、たえず手をうごかしている。O病院、W病院、T病院での状況を話す。「どこの病院でも神経安定剤をくれただけ」という。母親がデリケートな神経の持主でなく、Aの気持を理解してくれない。「父も母も『おまえは健康なのだから』とかまってくれない」という。

6月30日、T病院でカウンセリングをうけたことを述べ、カウンセラーが「あなたの気持はよくわかります」といったことに非常に反撥を感じた。「わかるはずがない」という。「カウンセリングなんかでなおるとは思えない。」という。

兄はきわめて無責任である。兄の顔を見るのも不愉快である。縁談がこわれても平気である。Aの縁談が最後になってまともらないのは同胞の病気のせいであるにもかかわらず、だれも平気である。父も母もそうである。とくに父に対しては憎悪を感じる。

この面接では父、兄、婚約者など男性への憎悪をつよく表現している。

7月10日、父は人の前では「よかった」をしたがる。しかし無責任で無能力である。ぶつぶつとばかりいっている。見えすいたうそやはったりが多い。Aの少女時代は戦後の苦しい時代であったが、父は何をしても失敗であったので、結局母が家の中で病人をかかえながら活動していた。父は自分の不満をAにぶちまけて、あたりちらした。(母と姉の言では父はAをもっとも可愛がったという。)死んだ姉はいじわるいしつけをした。たとえばAが食事のあと食卓を拭いていると、「食卓をふくのはきたないものをぬりたくることとちがう」という風ないい方であった。(これも母や姉の言とはちがっている。)

いままでは家を出るのが不安であったが、「ここへ来るのはあまり抵抗を感じないで来ることができる」という。神経安定剤は毎日服用。

7月中旬から8月上旬

父に対する憎悪、兄に対する憎悪がはげしく、面接で父や兄にふれてくると、顔面が緊張、紅くなってくる。一方自己に対する反省は少く、大学を出た時陶器をつくりたいと思ったが、皆に反対されたことなどをいきどおりをこめて話している。家庭については、「P家は人間関係が複雑でいやである」といい、「若い女の子が多いからボルテージが高く、すぐにみんな興奮する」という。この頃は朝起きるのがつらく、憂うつで泣き出すととまらない。姉や妹(B)につらくあたる。Bは赤坊のように大声でなく。(姉の言によると、BはAにつらくあたられるとがまんをしているが、そのあとで、姉の部屋へ来て大声で泣くという。)

職場の男性はとくに女の子の前では、はったりが多い。また女性は相互に嫉妬するので不愉快である。自分の将来はどうしてよいのかわからない。「先生どうしたらよいか指示をあたえてほしい。」とワーカーに訴える。

8月中旬から9月上旬

自分1人では生活が出来るとは思えない。世の中には女性1人で立派にやっている人もいるけれども、自分にそんな力があるとは思わないし、そんな女性がえらいとは思わない。自分は結婚して、子供をこしらえて、のんびんだらりと世の中をおくりたいと思う。自分はむかしからぐうたらで怠けものである。といっている。

母や姉については、宗教なんてものは、一時的な気休めにすぎないと述べて、母や姉が親鸞に近づいていることに批判をしている。

家庭におけるAの生活と神経症的兆候は以前と同様であり、乱暴はいよいよひどくなっている。母や姉によると、朝は10時頃起きて、何もしないでぼんやりと1日をおくっている。時々大きな音をたてたり、奇声を発する。注意をすると乱暴をする。しかしワーカーとの面接だけは、きちきちででかける。一度食事が遅れて間に合わないことがあったが、食べずに出かけたという。

Aとワーカーとの間は信頼関係が出来たようである。

8月下旬になると次第に落着きを取りもどして来たようである。家庭でもいままで1人で食べていた食事も皆と一緒にするようになった。この頃東京で独立の生活をしている親しい友人から便りがあって、某外国航空会社のホステスの募集があるから応募しないかとの誘いがあった。Aはオリンピックの前であり、何か仕事でもあるかもしれないという期待から、また家を離れて生活してみたいという気持もあって、ワーカーに上京の意志をつたえる。ワーカーは多少不安は感じたが、Aの自由な判断にまかせる。ただし上京の際は少くとも3日に1度ワーカーあての通信をすることを約束させる。

9月7日上京、友人の下宿に同居。

9月7日から9月末日まで

Aは上京中2日に1度の通信をワーカーに送っている。Aは友人の生活を観察し、自らを反省したものが多くなってくる。

友人については生活力旺盛で通訳や翻訳で月収は6～7万もあるが、その生活はあじけないものであり、所詮人間はあらゆる点で完全であることはできないといっている。Aは友人のために掃除をしたり、食事の用意をしてやりながら、試験をうけ、一方仕事を探したが、結局どちらも失敗し、9月末に帰阪している。

丁度上京する少し前から母親が病気になるAのワーカーあての通信ではつぎのようにいっている。

母に電話を下さいましたそうで、本当に有難うございました。家の皆から心配いらないという手紙も来ていますし、その点は一安心です。どうも母の病気が私が原因だったみたいなのがして自責の念に堪えません。9月〇日は母の誕生日でもう60近くなりました。(60を越したかもしれません。)考えてみればもう相当な婆さんなのに、私はいつまでも母が30才か40才位の時にそうであったような感じをうけるのですから……

5月、6月頃の神経症的兆候は全くなく、母に対する冷静な観察と自己反省が見られる。またAの上京に関する姉からワーカーへの通信はつぎのようにいっている。

もう先生へお便りしたと存じますが、Aは自分で皆支度をして、気嫌良く出掛けました。前々日あたり、「病気もはかばかしくないし、希望を将来に持てない」と色々母に申し、母も矢面にたって例のごとく大分弱って、「結婚でもさせようか」などといっておりましたが、それとて本人がその気にならなければならないし、まあ気も変わるかもしれないけれど、今の様子で、また前の二の舞（5～6月頃の状況）でもすればそれこそ大変、まあ東京行を止すにしろ、止さないにしろ、一步を踏み出せば、大分気分も違って来るでしょうと私がなだめました。母もそんなに非理性的な人でもないのですが、矢張り体の調子もよくないので一々気になる様です。そして「将来に希望の見出せないあの子の気持もわかる」といいますので、「そんなことをいえば、私なんかどうなるの、少くともAは自分さえその気になれば、どちらを向いても前途は洋々なるもののに——誰にしろ仕方がないから生きているし、生きるについては、これも仕方がないから色々働くだけで」と私が申しましたところ、母は「そうだそうだ」と申ししておりました。

この通信では母のAに対する理解は相当にすすんでいるが、姉のAに対する理解は未だしといわねばならない。ところがこのAの上京中に高校3年の妹Bの態度が次第に変化している。9月24日姉からのワーカーあて通信では、

……………妹（B）と一もんちゃくを起し、「私（B）が家にいて、ぶらぶらしていても別に困らないだろう」等々、Aとそっくりのことをいいますので、後で母と2人でガッカリしてお腹の底まであんな考えなら、またT病院でもつれて行って、ケースワーカーの方にお願ひしなくちゃと怒ったり致しました。そのあとでまた、妹（B）の様子を見て、「もっと厳しく生きなければ……………Aは何といっても母に万一のことがあっても、1人で生きて行けるけれども、そうでない我々は余程しっかりしなくては……………」と、ドントお説教を致しました。

Aが安定しつつあるにしたがって、Bの問題が表面化しつつあることがわかる。

10月上旬から11月中旬まで

10月1日から12日までに3回面接をおこなっているが、この間にAは自分の独立をのぞんでいる雰囲気家庭の中でつよくなっているようであるが、自分は家から離れて自分1人になることが不安であるという。Aは家庭内で孤立しているとワーカーに訴える。母親および姉と面接を通して知られることは、さきの姉からの通信で知られる通り、母親のAに対する理解は相当にすすんでいるが、姉はかえって母親とAの中を妨げているようである。ワーカーは姉と面接の必要を感じるのであるが、姉の方は進行性筋萎縮症もすすんでいるので、週1回の面接は無理であると判断し、できるだけワーカーあての通信をするようすすめる。

10月5日に9月上京中同居した友人から通信があり、ヨーロッパへの日本人旅行団の通訳にならないかという誘いがあり、Aはワーカーにヨーロッパに行きたい旨つたえ、ワーカーの許可をもとめる。ワーカーは自由な判断にまかせることにした。10月13日上京、直ちに渡欧。10月31日に帰郷している。Aはこの旅行中非常な緊張と多忙の中で暮しているが、再度渡欧の希望をもって無事帰っている。

11月中旬までの面接ではヨーロッパの印象を語り、ヨーロッパでの生活に自信ができたといっているが、一方では両親が渡欧に同意するかどうか心配であるといっている。Aの家庭での状況は平静で、問題は全く見出せない。姉はAの状況が一時的であってまたぶりがえすのではないかと心配している。

11月下旬から年末まで。

11月下旬にAに対する縁談があった。P家の家庭事情を承知の上での縁談であるので、母も姉も乗り気でこれを機会にAの問題を一気に解決しようとしていた。先方の男性もAに会って非常に積極的であり、年末までに3回会っている。ワーカーとの面接も定期的であって、Aは一方では結婚に関する期待感と、他方では前に幾度か破談になっているので、その不安感とが入りまじって興奮状態であった。

家庭ではAはBと仲のよい時と、AがBにあたりちらす時とがあり、Bの方は卒業期をひかえてだんだん異常になってゆく。Aは家事は全然やらない。母、姉と、Bによって家庭の仕事がされている。一家はAをはれものにさわるようにしている。

12月21日この縁談は破談になっている。やはり姉妹の病気が理由であり、先方の親戚の強い反対があったという。25日の母親との面接ではAにつたえが冷静なので安心したという。

40年1月上旬から下旬まで

Aは1月10日ある企業の臨時雇となり、外人担当の職場に入る。「金をかせいで渡仏の準備をしたい」という。面接は夜7時以降に行うことにする。この間母親との面接では、Aの独立を促進したいという。家庭ではAの生活はわがままで、とりあつかいがむづかしいし、Bがかわいそうだという。Aの独立のために100万円を渡したいし、またP家の借家であいているのがあるからそこへ別居させたいが、その方向にすすめてほしいと申出る。母親はP家の家庭の現状からみると崩壊の危機にあることをワーカーに訴え、Aの独立をできるだけ早く実現したいという。ワーカーはP家の全体からみて、その必要をみとめるが、Aの状況にはまだ不安であると答えた。しかしP家全体の不安を解消するためにもAの独立はのぞましいし、Aの現状ではある程度納得するであろうと判断して、1月30日の夜7時面接、母親の意志をつたえる。Aは独りでくらすことはたえがたいと答えたので、ワーカーは「もうこの話は止そう」というと、Aは「先生もとうとうさじをなげましたね」といって笑いながら帰っていった。

2月上旬から下旬まで

2月6日Aは学生時代からの親しい友人の結婚式に出席、帰宅後気嫌よくみやげものなどを皆に分けたり、談笑ののち就寝。睡眠剤200錠をのみ自殺をはかる。翌早朝姉により発見され、至急入院の手続をとったが救急車の手配がおくれ、近所のオート三輪でT病院に入院、3～4日の昏睡状態ののち意識を回復。

2月11日ワーカーはT病院を訪問、Aはくすりのため手足がいたみ、のどがひりひりして発声が困難であると訴える。

病室は二人部屋でA以外の入院患者はなく、そのあきベッドに寝て母親がずっと付きそっている。事実上の個室である。母親と少し話をしていると、Aは「先生にお茶を」という。帰途母親から状況を聞いたがあと4～5日で退院ができるということであった。ワーカーはAと母親との相互理解のまたとない機会であるからよく話し合うようにすすめて帰る。

年末から2月上旬にかけて、縁談の破談、家族から独立をすすめられたこと、友人の結婚とAにとっては重大な事件の連続であった上に、信頼していたワーカーからの独立のすすめはAを追いつめたものであるが、ワーカーに対する陰性転移があらわれたものと考えられる。しかし、この事故が未遂に終り、かえって母親との間に相互理解があらわれたことはAの回復に大きな貢献をしたといえる。

Aの自殺未遂事件はP家の人間関係を大きく変化させることになった。父親はAに対してはおせじをつかったりして気嫌をとる。母親は「病人の中の健康者というものが理解できた」とワーカーに語っている。Aに対する理解はAの渡仏の許可としてあらわれている。ところが姉およびBのAに対する態度は硬化し、とくにBのAに対する憎悪は顕在化しはじめた。母親はこのような生死の問題の時に姉もBも協力してくれるであろうし、それによって家中はうまくゆくようになるだろうと期待していたが、事実は反対の方向に向いつつあることが明瞭化しはじめた。とくにAの渡仏に関しては強硬な反対をしめしている。

2月中に3回面接を重ねたが、Aは全く健康をとりもどして、職場における積極性もあり、家庭でも安定をもって来た。

2月25日姉からの来信によると、

Bの憎悪の問題ですが、Aもベラボーに違いないとしても、お互い家族（特に我が家では）というものは知らず知らずに随分傷つけ合っているものですし、BとAの接触の度合から考えれば、必ずしもAに悪意があったとはいえないと思います。只あまでも憎悪が嵩じたということはB自身の中に問題があり（それは筋萎縮症のこと）、Bが表面ノホホンと構えて、そのことに拘っていない様に見えるだけ、どこへも持って行きようのない気持がそういった形に変えられているのではないかと思います。……………私自身のことを考えてみますと、その劣等感を優越感に変えるための手段としてあまでも我慢したということがいいうような気がします……………。）

とのべている。Aの自殺未遂事件をさかいにして、P家の人間関係は従来の母親—姉の軸に対するAの抵抗から、母親—Aの軸と姉—Bの軸の対立へと変化して来た。

40年3月はじめ、ワーカーはケースワークの中心をAからBに変更する必要があるようになった。Aは家庭においても職場においても積極的な意欲をしめすようになったが、BはAに対してことごときに抵抗をしめすようになった。

Bは家庭内では末子であり、Aとの間に1人男子もあったが幼時死亡したのでAとの年齢差も大きく現在でも皆から子供あつかいされている。またB自身ものごとくに拘泥しないほらかな性格のように思われ、一方問題の山積するP家ではBの養育はあまり注意されていなかった。しかし40年3月

は高校を卒業するという時期にあり、自分自身が進行性筋萎縮症であり、進路に関する不安をもちはじめたのであるが、この時にAの自殺未遂事件があり、家庭の自分への関心がうすいことを意識したといえる。また進路決定に際して母、姉、Aそれぞれ勝手な意見をのべているような感じをもっていた。3月高校卒業が近づくにしたがってBの不安はつよくなり、時としては興奮状況をしめすようになる。母や姉の手に負えなくなる。ワーカーは3月15日からケースワークの中心をAからBに変化することにした。

診 断

Aと同様に養育歴において母親に対する十分な依存関係をもっていないこと、Bは10才位より進行性筋萎縮症を発病して、Aに対する嫉妬、劣等感情をつねにもって来たこと。とくに2月のAの自殺未遂事件以来、母親の愛情がAにむけられていることによってAに対する競争意識が急に激化したといえる。母親の愛情を対象とした兄妹抗争。

治療方針

母親との関係を調整すること。

Bは週1回面接すること。母親、姉、Aの3人は月1回面接すること。

3月15日、Bは次姉と共に来所、ワーカーは姉に席をはずさせてBと面接、十数分沈黙がつづく。ほとんど下を向いている。言葉使いは子供の言葉であり、表情も子供っぽい。そのあとで、自分は「Aとちがってノイローゼではない。」という。そしてぼぼとなぜAに対して憎悪をもったかを説明しはじめた。Aの自殺事件まではAに対して腹が立っても、まだおさえることができたが、今ではAの顔を見てもむかむかするといって、2月7日（Aの自殺事件の翌朝）の説明をする。前述の通り救急車が間に合わず、近所のオート三輪の荷台にふとんをしいてAをねさせ、母親がそのかたわらにすわってAの介抱をしていたが、その姿がいかにもみじめだったという。母親をこんなにみじめにさせたAに対して非常な憎悪を感じ、腹が立ってたまらなかったと顔をこわばらせてのべていた。

ワーカーはAが母親によって介抱されていることに対してBがつよい嫉妬をもっていることを観察した。

3月下旬から4月中旬

Aに対する憎悪はかわらない。養育歴を思いかえして「出来のわるい子」として母や死んだ姉からよく叱られた。友人はないことはない。家でも学校でも冗談をいってよく人を笑わせるので、みなは、ものに拘泥しない明るい子であると思っている。しかし自分では、やはり不安で劣等感もある。ただすぐにわすれてしまう。

自分は身体も不自由だから着られるかどうかかわからないが、衣類に執着をもっている。美しい和服がとくにほしいと思う。

Aと一緒に外出した経験はほとんどない。いままでAからやさしくしてもらった記憶は全くない。

この数年間Aはときどき、「こんな家にはいたくない」「いつでもでていく。」といていた。「そんなにいやなら早くでていけばよい。」のにいつまでも家にいる。そして母親にあまえて、へんな声を出したりする。Aが母親と2人きりで話をしているのを見ると腹の中がにえくりかえりそうだという。

父親は皆ばかりにして問題にしない。だらしがなく、ときどき台所に来てはつまみぐいをする。そのくせ「ええかっこ」をしたがって、とくに人の前ではえらそうにする。(これはAの父親観と同一である。)

しかしAのように兄や長姉に対する憎悪はない。次姉もAに対しては不満をもっているが押えているらしい。

話題はAに集中している。

4月下旬から5月中旬

面接内容はAに集中している。必ず定刻に来所するが前半は沈黙が多く。後半に養育歴や家庭の状況を話す自然Aに関した話となる。

4月下旬母親との面接においてAのフランス行きを許可したいという申出があった。母親の言によればこの数年間Aが今ほど平静であったことはないとのことであった。またAとの面接においてもフランス行きを母親が許可するよう説得してほしいという。

ワーカーはAが女性として結婚の可能性を閉ざされている点を考慮し、また現状では心理的に安定しているので、この際Aにフランス留学をさせることが、Aの生涯にとってプラスかになるだろうと判断し、4月末日ワーカーは母親と面接、Aのフランス留学をすすめる。母親も同意見なることを表明した。5月4日、母親と面接、3人の姉妹にいずれも100万円をあたえ、Aはそれによってフランスに留学することを許可した旨報告があった。

5月6日、Bとの面接で、Bは平静にAのフランス行きをみとめ、自分も100万円をもらったから文句はいわないという。次姉がいらいらしているらしい。ところがこのころからBの家庭における状況はいよいよ悪化している。一度家出をしており、家庭内はきわめて不安定となっている。次姉よりワーカーあての通信ではこのようにつたえている。

Bがこのころ、とても不安定で、針の転んだ様なことにも(Aとの関係で)事を起そう起そうとしていて、昨日はじつに、ホントにつまらないことに腹をたてて、家を出て、母のお友達のところへ行ってしまう。これには私も大いに責任があり、水曜日、先生のところから帰りましてから大分追詰めたからだと思います。少しBを信用しすぎていたのだと思います。母もゲンナリしていますし、私もBのこのことは心配しますが、連鎖反応がどうなるか必死です。Aはこのところ朝も割合早く起き、少しは手伝ったり、良い状態だったのですが……………

次姉はBの悪化にともなって、Aまでまた神経症になるのではないかと心配している。

5月下旬から6月中旬

Aはフランス行きが決定すると希望をもって、その準備をはじめ、多忙となったが、家庭生活は朝

も早くおきて家事を手伝い、夕食の準備をするなど、いままでにない状況となった。母親との関係も非常によい。

Aが安定し、希望をもって働くに逆比例してBは不安と興奮状態がつよくなって行くようである。また次姉が、たえずいらいらしている。Aが母親と話をしているのをみるとたまらないといい、衣類でもAがふれたものは不潔感がある。「もうフランスでもどこでも早く出て行ってほしい。」「4月からはじめた洋裁、和裁も少しも面白くない。しょうがないからやっているだけだ。」「Aだけがよいことをしている。」という。面接はぼつぼつと話す、きわめて感情的である。

6月16日、次姉より長文の手紙があり、次姉自らの自己反省と自己分析を行っている。

このころ私も多分に異常性を帯びBが先生のところへ参る前をねらって、悶着を起したのはお聞きおよびと思います。母に向ってはBのいう様なことをいい、Bに向っては母の様な説教をしておりましたが、それが飽まで、中を取り持つ代弁ではなく、自分の本心だったのだから嫌になってしまいます。

私は何故渡仏ということにこだわりを感じるのか訳がわからないのです。Bも財産は貰える訳ですし、縁談の仕度ということもありましたし、国内で独立の為の資金といい、どれを考えても抵抗を感じませんし、また自分自身こればっちも海外へ行きたいなどと思いませんのに……………

私の最大の悲しみと申しますと、それは昨夏以来、母の信用を失ってしまったことです。私の様な者が生きていきますのには人に信用されたり、自尊心を満足させることが、どんなに大きな支えになっていたか、それが今に至って崩れるということは生きる基盤が大きく揺いだ様な気がします。

母親とAの相互理解の進展は次姉にも大きな影響をあたえていることがわかる。

6月下旬から7月上旬

Bとの面接は以前と同じく会話はAに集中しているが、この時期では「昔はAがおなじことをしていても腹は立たなかった。いや昔の方がAはひどいことをしてあたりちらしたのに憎くなかったのはどうしてだろうか。」とワーカーにたずねることが多くなった。6月下旬の面接はこのような自己反省がつよくなっている。しかし家庭では興奮状態はいよいよはげしくなっており、7月のはじめには暴力をふるってAと衝突している。次姉との面接ではBが「いよいよ気が狂ったと思った」とのべている。その翌日には洋裁用のものさしであたりかまわずたたき廻り、器物をなげ、大声で泣きわめくという状況が数時間つづいた。その翌日（7月3日）の夜、皆が就寝したのち、Bは2階の自分の寝室から、不自由な身体で自分のふとんをもって階下において母親のかたわらにしき、就寝している。

7月7日の面接ではBはこの事件をワーカーに話しているのであるが、前回までとは全く異って明るく、素直に、大きな声でわらいながらの面接となった。この事件をさかいにして、BのAに対する憎悪は次第にうすれていく。Bは母親の愛情をこのような形でとりもどしたということが出来る。

7月中旬から8月上旬（終結）

Bの態度は非常に明るくなり、声も大きくなった。以前のように憎悪をこめてかたるのではなくなった。父親のことを冗談のように話すようになった。「やっぱり姉妹やわ。前にはなんであんなに

にくかったのかわからん。」と最後の面接ではのべている。

家庭では父親の性格、行為は相変わらず孤独であるが、以前に比して好意的にみられて、うけいられようである。BもAとふざけたりして、楽しくなったといっている。Aは面接において、健康を完全にとりもどし、身体もたくましくなり、態度も積極的となり、8月下旬にフランスに出発するという。

8月11日、母親と面接、7月はじめの事件以来家全体が安定してきたといっている。ただ次姉が多少不安定になってきていることが心配だといっている。

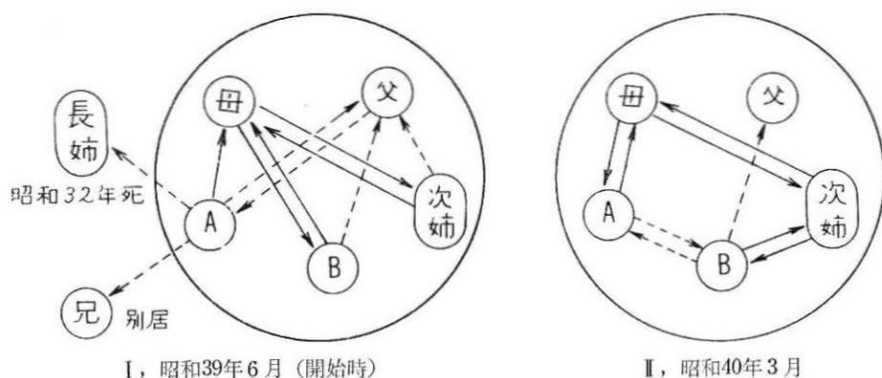
以上のような経過でP家に対するファミリー・ケースワークは終結したのであるが、P家の問題はこれで完全に終結したのではない。AからBへと問題が転移し、それぞれを解決して来たのであるが、その中で中心となり、犠牲となって来た次姉が今度は問題をもちはじめている。しかし、次姉は自ら問題を処理して行くだけの能力があるとワーカーは判断している。

次にこのケースワーク終結後の反省はつぎの通りである。

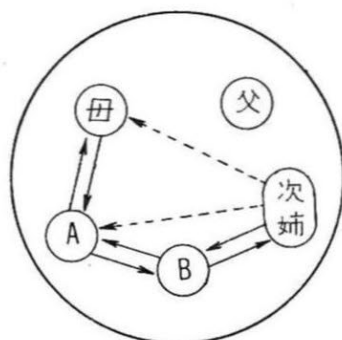
1. この家族は進行性筋萎縮症という特殊な病気をもっているのであるが、全員の教養が高く、かつ経済的に余裕があり、これらがケースワークを成功させた大きな理由であると思う。

2. Aの自殺未遂はケースワーカーとしては家庭全体の危機と個人のそれとのずれであって、どちらかといえば家庭の崩壊をくいとめることを優先せざるを得なかったのであるが、(40年1月)ワーカーとしてはAの状況判断に適確さを欠いていたのではないかと考えられる。また家族全体を意識しすぎたともいえる。

3. このケースのプロセスは三つの段階に分けられる。それぞれの段階の家族の人間関係をソシオグラムにあらわすとつぎのようになる。



第2図 I, II, III, ソシオグラム



各段階における家族関係は上図の通りである。

(実線は信頼関係, 点線は不信または憎悪をしめす)

Ⅲ, 昭和40年7月 (終結時)

図の説明

- I
1. ④は死んだ長姉と別居中の兄に対してつよい憎悪をしめている。
 2. 母は④に健康であるという理由で独立をのぞんでいる。
 3. 母と次姉とはつよい信頼感をもっている。
 4. 父は家族全員から不信の形である。
- II
1. ④の意識から長姉・兄はなくなっている。
 2. ④と母とは相互理解が生じる。
 3. 次姉は④に対して不信感をもつが表面的でない。
 4. ⑤は④に対してはげしい憎悪をもつ。
 5. ④—母, ⑤—次姉の対立がみられる。
 6. 父は孤立
- III
1. 母—④—⑤—次姉の関係は良好である。
 2. 次姉は母と④に対して不信をもつが表面化しない。(自分でおさえる)
 3. 父は孤立しているが, 全員に好意的にあつかわれている。
 4. ④は8月渡仏の予定

面接の月別回数

年 月	母 親	次 姉	A	B	計
39. 6	2	2	3		7
7	2	2	4		8
8	1	1	5		7
9	1	1	1		3
10	1	1	3		5
11	1	1	4		6
12	2	2	3		7
40. 1	1	1	3		5
2	1	1	3		5
3	1	2	2	3	8
4	1	1	2	5	9
5	1	1	1	4	7
6	1	2		4	7
7	1	1	1	4	7
8		2	1	2	5
計	17	21	36	22	96

この他 母親, 次姉よりの通信, 合計32通
Aよりの通信18通
電話連絡によるものは記録していないが多い。